

The Eastern Buddhist Society 公開セミナー

第9回 鈴木大拙訳『教行信証』信巻を読もう！

講師：安富信哉

(大谷大学教授・EBS 事務局長)

真実信釈（1）

本日は先回と重なるとは思いますが、^{しんじつしんしゃく}真実信釈のところをもう一度振り返りながらたずねてみたいと思います。

大拙訳¹を皆様はお持ちだと思いますが、大拙訳の最初の方に十二の特質を信心について親鸞聖人は挙げておられるわけです。それがいわゆる^{たんどく}歎徳十二句と言われるところです。その後、先回にも触れていることですが、『真宗聖典²』で言いますと211頁です。その後ろの四行目のところですね。もう一度振り返ってみたいと思います。

先回はそれからさらに進んで、聞ということを中心にお話させていただいたわけですが、もう一度別な視点で今日はたずねてみたいと思いました。そこでそのところを読んでみたいのですが、211頁の後ろから四行目です。

しかるに^{じょうもつ}常没の^{ぼんぐ}凡愚・^{るてん}流転の^{ぐんじょう}群生、^{むじょうみょうか}無上妙果の成じがたきに^{しんぎょう}あらず、^{まこと}真実の^{かた}信楽
実^{まこと}に^{かた}獲ること^に難し。何をもつての^にゆえに。いまし^に如来の^に加威力^にに^よるがゆえなり。
^{ひろ}博く^{だいひこうえ}大悲広慧の^よ力に^よるがゆえなり。

というような親鸞聖人のお言葉がございませう。そのところを大拙先生の訳を拝読いたしますと、

This being so, the fruit of an unsurpassably wonderful [Enlightenment] is not difficult of attainment for all those ignorant beings who are all the time in the state of being drowned [in the waves of birth-and-death] and also for those masses of people who are in the state of transmigration ; the difficult thing to come up on the faith which is true and real. Why? Because the authoritative power of Nyorai is to get hold of them, the universally benefiting and enlightening power of Nyorai is to work in them. [They cannot achieve all this by their

¹ DTS: *The Kyogyoshinsho: The Collection of Passages Expounding the True Teaching, Living, Faith, and Realizing of the Pure Land*. Shinshu Otaniha, 1973.

² 『真宗聖典』真宗聖典編纂委員会，東本願寺出版部，1978.

own efforts.]³

そういう言葉がございますね。そのところは本願寺訳(CWS⁴)ではどうなっているかと言いますと、

For the foolish and ignorant who are ever sinking in birth-and-death, the multitudes turning in transmigration, it is not attainment of the unexcelled, incomparable fruit of enlightenment that is difficult; the genuine difficulty is realizing ture and real shinjin. Why? Because this realization takes place through the Tathagata's supportive power. Because it comes about wholly through the power of great compassion and all-embracing wisdom⁵.

そういう言葉になっておるわけです。

***Faith* について (1)**

そこで幾つかのことが気がつかされることです。一つは大拙先生は信心ということについて *Faith* という言葉を使っておられるわけです。

信心 — DTS Faith = 二元論 (キリスト教的)
— CWS Shinjin

信心という言葉について DTS(Daisetz Tetaro Suzuki)では *Faith* という言葉を使っている。それから CWS(本願寺訳)では *Shinjin* とそのままにしているわけです。

それでこの言葉については *Faith* というのは或る意味においては問題があるということが言われております。*Faith* という言葉はどうしても二元論的であると。或る人が神を信じるというように、私が神を信じるというように、*Faith* というのはある種、二元性、二元論的な立場にあるわけです。そういうことから *Faith* という言葉は避けなければならないという立場に立つ人も少なくありません。それでは代わりに何があるかというとなかなか適当な言葉がないんですね。この私が神が信じるというと、私と神を二元論化するわけですが、しかし親鸞聖人の信心というのは私自身の迷いというものが破られていく、目覚めの信なのですね。そういう意味からすると *Faith* という言葉は何かしら不適切な感じがしないでもありません。非常にキリスト教的なおいがすることから、避ける傾向にある。

本願寺派の方では *Shinjin* という言葉を使っておりますが、これは翻訳しない立場ですね。しかし言葉というものは翻訳しなければ伝わらないわけですから、この言葉を翻訳しない

³ DTS, p.88, 1.5.

⁴ CWS: *The Collected Works of Shinran, Volume I: The Writings*. Jodo Shinshu Hongwanji-ha, 1997.

⁵ CWS. p.79, 1.28.

ということははたして良いことなのかどうかという問題が残ります。そのところが親鸞の信が目覚めの信であるという、Faith は使わない方がよいと言われるわけです。

ただ Faith という言葉は単に使うてはいけないということもちょっとできないような気がしないわけではありません。Faith という言葉は非常に包括的な意味があるということを言っている人も西洋人にはいるわけです。Wilfred Cantwell Smith⁶という学者が居ります。この人が"*Faith and Belief*⁷"という名著の誉れ高い本を書きました。これによりますと Faith というのは人格的なものだと言うのです。Faith というものは深くて豊かで人格的なものだと言うのです。信念(Belief)というのはある思想を保持する、そういう意味があるということで、Faith と Belief は違うと。そう彼は言うております。Faith というのはあらゆる宗教に通用する、だから Faith はヒンズー教にもあるしイスラム教にもあるし仏教にもある。Smith 氏はそういう立場に立って、信仰というものの包括的理解に立っているわけです。

大拙先生はこの立場に立っているように思います。Faith というものを包括的に理解した立場に立って、それで目覚めというものも Faith の中に含まれるのだという立場から大拙先生は Faith という言葉を採用しているのではないかと思います。それから Faith という言葉を採用するについてそれほど議論があったようにも聞いておりません。行という言葉を翻訳する、あるいは本願という言葉を翻訳するについては非常に議論があった、あるいは自分でお考えになり、また問題を提議されたわけですが、Faith については広い立場から理解してたということが言えるかと思えます。

大拙の思想

それでご承知のように、大拙先生の思想は、大きく言いますと、

- 大拙思想 — ^{そくひ}即非の論理
- 靈性的自覚

となります。この即非の論理というのは『金剛般若経』などに、「A は A である」という立場と同時に「A は A でない」という立場、この二つの立場をあげるわけです。このような否定の論理、「A は A である」、もちろんそうですが、同時に「A は A でない」ということです。「A は A でない。ゆえに A である」というような立場ですね。「自己は自己でない、ゆえに自己である」。宗教的な立場にくるとそういうこととなります。私達は一回、自己否定を通して初めて本当の自己に出会う。そういうことが即非の論理で言われるわけです。これは『金剛般若経』などの経典によって即非の論理が言われるわけです。同時に靈性的

⁶ Wilfred Cantwell Smith (1916-2000) 元ハーバード大学比較宗教学教授。

⁷ *Faith and Belief*, Princeton University Press, 1979.

自覚ということも言われます。

大拙先生の思想は特に『日本的靈性⁸』の序文に即非の論理が出てくるわけです。中に入ると日本的靈性的自覚というのが出てくると思いますが。これと靈性的自覚の二つが大拙先生の思想を端的に表現していると思います。

Faith について (2)

したがって大拙先生が Faith という言葉を使ったからと言ってキリスト教的な意味で使っているわけではなくて、靈性的自覚という言葉を含んでの Faith である。そういうことは私達が注意しておくべき必要があると思います。それから確かに Faith という言葉はいろいろと不便な点がありますが、Faith の中に靈性的自覚という面も含んでいく、というのが大拙先生の立場ですから、大拙訳『^{きょうぎょうしんしやう}教行信証』を読んでいくということは、やはり大拙の思想というものを理解したその上で読んでいかないと、ただ訳文だけを読んでいても理解しにくいところがあるのではないかと思います。大拙の思想の文脈の中で Faith を理解していくべきであろうと思います。

Faith という言葉はいろいろな問題を抱えている言葉ですから、Faith を使うべきが使うべきでないかという長い論争の経過もあります。それについては以前、文章を書いたことがあります。いつか書いたものについてご紹介してみたいと思います。しかし大拙先生が Faith を使っているということについて、やはり相応しくないのではないか、という見解もあります。大拙訳の言葉の訳語の使い方について幾つかいろいろと問題にする人も居るわけですがけれども、しかし大拙思想の文脈の中でこの Faith も理解した方が良いのではないかというのが私の意見です。

真実信釈 (2) 力について

「^{むじやうみやうか}無上妙果の成じがたきにあらず、^{しんぎやうまこと}真実の^{かた}信楽実^{かた}に獲ること難し」というこの言葉については、前回、先々回くらいに少し話題にしたことがございましたけれども、そのところで以下の文があります。

聖典: ^{しんぎやうまこと}真実の^{かた}信楽実^{かた}に獲ること難し

DTS : the difficult thing is to come upon the faith which is ture and real

CWS : the genuine difficulty is realizing ture and real shinjin

⁸ 『日本的靈性』岩波書店, 1972.

ここで「獲る」という言葉に「come upon」(たまたま出会う)という言葉を使っているわけです。それが CWS では「realizing」(成就する、実現する)を使っている。実現するということが難しいのだと言っているわけです。私としてはこちらの方が解り易い。「come up on」は少しわかりにくいような気がします。いずれにしても本当の Faith に出会うということは本当に難しいのだということです。そしてそこに何故だということが出てくるわけです。

何をもってのゆえにかい^{によらい}まし如来^{かいりき}の加威力^よに由るがゆえなり。博^{ひろ}く大悲^{だいひ}広慧^{こうえ}の力^よに因るがゆえなり。

となっているわけです。力ということが出てきます。そこでどのように訳されているかと言いますと、

DTS : Why? Because the authoritative power of Nyorai is to get hold of them, the universally benefiting and enlightening power of Nyorai is to work in them.[They cannot achieve all this by their own efforts.]

CWS : Why? Because this realization takes place through the Tathagata's supportive power. Because it comes about wholly through the power of great compassion and all-embracing wisdom.

となっています。大拙先生の方は如来の威力(the authoritative power)に力をいれております。Nyorai という言葉は逆に翻訳しないんですね。Tathagata としている場合もありますけれども。信心は Faith にして翻訳するんですが、如来については残しておくことがあります。

「如来の威力が衆生(them)をつかむ(get hold of)。如来の恵みの(benefiting)、また覚醒する(enlightening)力が衆生の中に働くからである。そして彼ら衆生は自力をもってしてはこのような信心というものを成就することはできないのである」こう補足しているわけです。

下の方の CWS の翻訳では、「なぜでしょうか。このような目覚めは」、このような実現と言っても良いわけですが、「如来の助けていく力(supportive power)によって」、それが一つ、またもう一つは、Because it comes about wholly through the power of great compassion and all-embracing wisdom.つまり「大悲とあらゆる衆生を包摂する智慧の力を通して、これが生じるからである」と。

両方ともそれぞれの訳として一長一短あるかと思えますけれども、解り易いと言えれば下のほうですが、きちんと訳したのは上の方という感じもします。大拙先生には珍しいくらい『教行信証⁹』が逐語訳になっています。

それで力(power)ということが両方使っております。自力というのは own effort、あるいは self power と訳しますけれど、大拙先生は own effort を使っています。power という言葉

⁹ 『教行信証』：『真宗聖典』「顕浄土真実教行証文類」p.149.

は両方使っております。

またあらためて思われるのは信心というものが力によって生じるということです。そこに因縁というものが見られるわけであります。如来の加威力と大悲広慧の力、二つの力、二力あるわけです。この二力をどう見るかということが真宗学では問題となりますが、やまべしゅうがく山辺習学¹⁰とあかぬまちぜん赤沼智善¹¹という方が『教行信証』を講義しておられます¹²けれども、その中では次のように言っておられます。

二力 — 如来の加威力 — 釈迦 — 縁力^{えん}
— 大悲広慧の力 — 弥陀 — 因力^{いん}

如来の加威力は釈迦、大悲広慧の力は弥陀です。これは見方は色々とおあるかとは思いますが。また「よる」ということが親鸞聖人にとって非常に重要ですね。なぜなら因として「因る」のと、「由る」の方は經由、経てということで、こちらは縁です。間接的なより方ですね。力にも二力を見ている。つまり縁力は釈迦如来であり、因力は阿弥陀如来と。だから我々が信心を起こすということは二力によっている。つまり因力と縁力によっているということです。そういうことで因縁の道理というものをみている。信心が起こるのにも因縁の道理があるという。こういうのは非常に仏教的だと思うんですね。

キリスト教の場合、因縁の法則というのはあまり言わないのではないかと思うんです。例えばパウロ(サウロ)がダマスコに行ってイエスを迫害しようとした。そのとき突然光に打たれて回心したという話があります。回心の背景に非常に突発的な、神秘的な、奇跡的なものがあると思います。その辺りが仏教では回心ではなく回心^{えん}というわけですが、回心の場合は様々な因縁があって回心するということになります。突然、奇跡のように光に打たれて泣き出して回心する。そういうことからサウロはパウロになった。『ロマ書』に出てくるわけです。

動態性

様々な因縁によって、因力と縁力によって、人間の宗教への回心が生ずる。そこに仏教的な理解がある。それが一つの力になるかと思えます。こういう力というものが働いてくるのが仏教なんです。これは信仰をみていくということにおいて、動態的であると言っても良いかと思えます。仏教の教えは全体的に動態性があると私は思います。

¹⁰ 山辺習学 (1943~1944) 元大谷大学学長。

¹¹ 赤沼智善 (1884~1937) 元大谷大学仏教学教授, 原始仏教専攻。

¹² 『教行信証講義 信証の巻』法蔵館, 1951.

動態 = 活動している状態 ←→ 静態
(dynamics) (statics)

動態 — 受・動態 (passive)
— 能・動態 (active)

動態という言葉は動く状態、変動している状態、活動している状態ということです。あまり使わない言葉だと思います。これは静態に対しますね。ダイナミクスと言っても良いかもしれませんね。静態はスタティクスですね。そういう動態性というものがある。動態性というものも内に働いていくのと外に働いていくというのがあると思いますけれど。受となれば受動態(passive) ですね。それから能動態(active)。動態ということには受と能の側面があると思います。

そして力というものも受けていくところと発起していくところというがあると思います。

力 — 1・信心が因縁の^{もよお}催しによって発起される(受動)
— 2・発起した信心が^{おうどう}応動してゆく(自発)

一つは内に働いていく方と言いますか、信心が因縁の催しによって発起されるという側面。もう一つは信心が発起した後、応動してゆくことです。そういう二面性があるように思います。このうち信心が因縁の催しによって発起されるという側面は力を受け止める方の立場からすれば受の方です。それに対して信心が一つの力をもって応動していく、応動というのは因縁の催しに^{おうどう}応えて動いて行くということです。この受と能、受動性と自発性と言ってもよいですが、そして発起した信心が^{おうどう}応動してゆくのが自発性と見ていくことができると思います。

『教行信証』を拝読していきますと信心を得ることは如来の加威力と大悲広慧の力である。こういうふう^{もよお}に信心が因縁の催しによって、如来の加威力が縁となり、大悲広慧の力が因となって発起してくる。これは信心の受動性ですね。私が起こすわけではない。信心とは因縁の催しによって起こってくる。そういう力である。それに対して発起した信心が今度、^{おうどう}応動して行く、これは能動性と言ってよいと思いますが、自発性、その立場これが全体的に動態性なんですね。『教行信証』の信巻を拝読しますと、この二つが説かれる。信心が因縁の力によって起こってくるという側面と、その起こった信心が今度積極的に生死を超えていく力となって、外に出て行く。その受動面と能動面、受動性と自発性と言いますか、それが前半が受動面であって、^{えこう}回向の力によって信心が起こる。その回向の力によって信心が今度は^{りやく}利益をもって動いて行く。これが^{こんごうしん}金剛心・^{ぼだいしん}菩提心(自発性)という言葉で説かれるようになるわけです。これは非常にダイナミックな感じがします。これが信心の

ダイナミズム、動態論になるかと思えます。そういう意味で『教行信証』というのは非常に動態的なものがあります。非常に動的でありダイナミックです。キリスト教のことはよくわかりませんが、因縁の催しによって発起されるという面だとか、それが応動していくというような面、passiveな面とactiveな面との、論理的な説明というのは、キリスト来教ではされていないように思われます。親鸞聖人の『教行信証』はそういう非常に論理的に説明されています。信仰というと、受け止めるだけという非常に静態的なものと受けとられがちですが、そうではない。ほんとうに動いている。そのことがよくわかります。今の如来の加威力と大悲広慧の力ということから改めて親鸞の力というものに対して見方がでてくるわけです。

本願 — 本願力 — 根源的能動性(因) — 成就 — 獲信(果)
ひとつの願というものが願力として力をもつわけです。本願というのは一つの力です。我々を悟らしめようとする力です。だから本願は本願力ともいうわけですが、これは根源的な能動性ですね。そういう根源的な能動性であって私たち衆生を覚醒せしめる大きな働き、これが本願です。その成就ということが獲信、信心の獲得ということです。そういう意味で根源的能動性が因であり、獲信が果であるということになります。そして獲信、獲得された信心というものがさらに動いて行く。それが信心の能動性というものに繋がっていくわけです。円環的にあるということが言えます。

大拙訳『教行信証』の動態性

そういう面で『教行信証』の動態性ということが大拙訳にはあるのではないかと私はそのように思っています。本書の英訳タイトルをうかがってみましょう。

聖典：顕浄土真実教行証文類

DTS: The Collection of Passages Expounding the True Teaching Living, Faith, and
Realizing of the Pure Land

CWS: The True Teaching, Practice and Realization of the Pure Land Way

大拙訳『教行信証』は動態的ではないだろうか。その端的であるのは何処にあるかと言いますとタイトルですね。顕浄土真実教行証文類の訳を、大拙先生は「The Collection of Passages Expounding the True Teaching Living・・・Realizing」と動名詞(Gerund)を使っているわけです。これは動名詞というのはご承知のように動詞に-ingをつけることによって名詞化しているものを言います。その動名詞ということはやはり動態性を現しているわけです。Teachingは名詞になっているわけですが、LivingやRealizingは-ingを使っている。大拙先生は-ingを使うことによって動詞を名詞化して使っているわけです。そういうところ

に動態性を見ることができると思います。これが大拙先生の一つの特徴です。ところが問題は「顕浄土真実教行証文類」と信が入っていないのに大拙訳は Faith が入っています。ここのところも大拙訳の問題です。そういう点では CWS は「The True Teaching, Practice and Realization of the Pure Land Way」とオーソドックスな訳です。「浄土真実教行証」、顕と文類は落としています。それに対して大拙訳は Living とか、非オーソドックスな訳語を用います。そして Faith が入っています。問題がありますが、一つの動態性、-ing を使うことによって、親鸞教学は非常にダイナミックな教学なんだと。そういうことがタイトルのネーミングでわかるわけです。やはり私自身も親鸞教学をもっと動的に理解しなければならないのではないかと思います。単に構造的なものではない。そこには力学、力動性がある。そういうことが注意されるべきだと思います。

ダイナミズム

今から二十年ほど前になるでしょうか、『構造と力¹³』という本を京都大学の哲学科の若い先生が出されました。浅田彰という方です。「構造と力」ということはやはり今までの構造主義的なものに力学的なものが入らなければならないということを行っているのではないかと私が勝手に思っているわけです。難しい哲学書ですが、ものすごいベストセラーになりました。読んでわかるような本ではないのに、どうしてこんなに売れたのかなとも思いますが。

親鸞教学は構造的に理解するだけでなく力学的に理解していかなければならない。そういうことを『構造と力』という本を読んで思いました。大拙先生の訳を見ても非常に動的に理解している。教行信証を並べていって整序していく。そういうことではない。それは先輩の先生方もそういうことを理解された、考えをもたれたのではないかと思います。

てらかわ しゅんしょう
寺川 俊 昭¹⁴

『歎異抄の思想的解明¹⁵』

↓

『親鸞の信のダイナミクス：往還二種回向の仏道¹⁶』(1993)

¹³ 『構造と力』浅田彰、勁草書房、1983.

¹⁴ 寺川俊昭、大谷大学名誉教授.

¹⁵ 『歎異抄の思想的解明』法蔵館、1978.

¹⁶ 『親鸞の信のダイナミクス：往還二種回向の仏道』寺川俊昭、草光舎、1993.

『親鸞のコスモロジー¹⁸』



『親鸞のダイナミズム¹⁹』(1993)

寺川俊昭先生は『歎異抄の思想的解明』という本をお書きになりましたけれど、それがやがて『親鸞の信のダイナミクス・・・二種回向論』という本をお書きになる。ここで二種回向論をやるということは往還、信心を発起する、信心の受動面の働きを着眼していくということです。そして大峯顕という哲学がご専門の先生がおられます。『親鸞のコスモロジー』という本をお書きになっておられます。この方もやがて『親鸞のダイナミズム』という本を出版されるようになります。構造的に理解していく立場から動的にダイナミックに理解していくということが流れとして一つあります。しかし大拙先生は既に親鸞の教学の力動性ということが動名詞を使うことによって理解しておられるように思います。私も、たいへんにつまらない内容ですが、『信の構造²⁰』という本を書きました。構造的に明らかにしたんですが、この次は『信のダイナミズム』という本を書こうと思っています。前年ながらまだ論文が足りていません。論文が溜まってきたら書こうかと思っています。構造から力へということをおもいます。

ダイナミズムは最近よく使う言葉ですが、私自身が影響を受けたのは、Paul Tillich²¹ という人の動態論です。"Dynamics of Faith"²²という本を書いています。信が起こってくる背景といいますか、根源的なものについて述べていません。信仰というものは勇気をもって人生を歩んでいくものだというようなことが基本的な内容です。だからキーワードの一つは courage 勇気です。彼の基本は「the dynamics of faith are the dynamics of man's ultimate concern²³」というところから出発します。「信仰の動態性とは究極的関心の動態性である」。この「究極的関心」という一点が彼の最も基本的な概念ですね。宗教はどのような宗教であっても、人間の究極的関心について明らかにしているものであるということです。「人間は何処から来て何処に行くのか」というような色々な問題があるわけです。そう言ったことを述べていくなかでこの「勇気」ということばがキーワードになっていくわけです。信

¹⁷ 大峯 顕, 大阪大学名誉教授.

¹⁸ 『親鸞のコスモロジー』大峯顕, 法蔵館, 1990

¹⁹ 『親鸞のダイナミズム』大峯顕, 法蔵館, 1993

²⁰ 『親鸞・信の構造』安富 信哉, 法蔵館, 2004.

²¹ Paul Tillich (1886-1965) プロテスタント神学者, 20 世紀のキリスト教神学に大きな影響を与える.

²² *Dynamics of Faith*, Harper and Row 1957.

²³ *Dynamics of Faith*, p.1.

仰は人間にほんとうに勇気を与えるものだと言います。ニヒリズムに呑み込まれそうな、あるいは非存在(non-being)に呑み込まれていくようなもの、そういう脅威に対して勇気を・・・・。信仰は勇気の一つだということが彼の持論です。そういう中で信仰というものは人間に知(intellect)と情(emotion)と意(will)というものを与える。親鸞聖人の信巻を見ると、「まことに知んぬ」「かるがゆえに知んぬ」これは知です。そして情の方は「悲しきかな」、そして「それおもんみれば」これは意の方です。精神の三側面というのが親鸞の中に反映しています。Tillich はキリスト教の視点から、信仰とは知と情と意のところに動いていくんだというわけですが、同じように親鸞聖人も信心において「まことに知んぬ」と言って頷いていくと同時に、「悲しきかな、恥ずべし、いたむべし」といって情感をもっている。同時に真理に肉薄していこうとする。親鸞の教学の動態性を、逆に Tillich を通して私は見るができるような気がする。たいへんおもしろいと思います。

質疑応答

今日は動態ということを中心にしてお話をしました。後5分ほどあります。何かご質問がございましたらどうぞ。

質問者: 先ほど力の問題がございましたが、釈迦の加威力(縁)と弥陀の大悲広慧の力(因)。それで因縁と言ったらもともと弥陀の大悲広慧の力が最初にあって、その後に釈迦の加威力というものがあるのでしょうか。

安富 : その後と言うか。根源的なものと全部関係というよりも、深さの問題だと思います。例えば親鸞聖人が、それは具体的、体験的事実に立っておっしゃっていると思うのですが、29歳の時に信心を獲得されたというときに、法然上人の教えの力が大きいわけです。それがいわば如来の加威力ですね。親鸞聖人にとってはお釈迦さまのような存在なのですね。それが縁となるわけです。しかし法然上人に会ってというけれども、もっと根源的なところまでいくとお釈迦さまのところまで行って、さらに根源的なところまでいくと阿弥陀さまのところまでいくということですね。法然上人は現実に見える存在ですけど、阿弥陀さまは見えない姿ですね。だから力と言うけれども顕在的な面と潜在的な、見えない、むしろ根源的と言った方が良いかもしれない面があります。それは例えば浄土真宗で言いますと、念仏する者になる言った場合、お父さんから教えられたとか、お寺に生まれたということが顕在的です。見える面です。見えない面で何が働いているかと言うと、そのお父さんをお父さんたらしめた、その根源的な力があるわけです。

だから顕在的な力と潜在的な力、潜在的な力はもっと内面的というか、それは因力と言っても良いと思いますが・・・

質問者: そうするとですね、例えば釈迦如来とか阿弥陀如来とか、如来やブツダというのは、その後ろに潜在的な力というものがあるのでしょうか。

安富 : 如来と言いますから、「如」から「来」るわけですから、来るということ自体ひとつの力ですね。「如」というのは真理ですから、真理が到来するということです。真理が動くわけですね。しかし真理が動くわけですが、動く力というものが見えない面と見える面がありますから、お釈迦さまは歴史的な存在者として見えるものです。歴史的に現れて80年の生涯を終えられた方です。そして真宗の文脈でいうと具体的には『大無量寿経』というお経を説かれた方です。言葉になっているわけですね。言葉になる以前ですね。釈迦如来はなぜ言葉にして書いたかと言うと、釈迦如来をして動かしめた力があるわけですね。それを「願」というわけですね。キリスト教的に言えば受肉ということをするわけですが、お釈迦様がいわばお経などの言葉になる。言葉にらしめた根源的な力、それが「願力」です。親鸞聖人は力という面に具体的なものと根源的なものを見ていたと言うことができると思います。それは親鸞の思想の中で大きなものだと思います。

親鸞の思想は必ず阿弥陀と釈迦の二尊教です。二尊ということが非常に大切です。我々から見ると見えないものを形にしているのは仏像ですが、あれは見えないものを見るようにしているわけですね。具体的には言葉です。言葉が最も抽象的な言葉として現れて来たのが名号・南無阿弥陀仏という形なわけですね。南無阿弥陀仏を生ましめた根源力があるわけですね。それが願です。南無阿弥陀仏を称えなさいと教えてくださったのがお釈迦さまなのです。そういう点で親鸞聖人はもっと具体的にお釈迦さまが日本に現れて、法然上人として我々に教えてくれた、そこまで具体化するわけですね。

その辺りが神秘的と取れば取れないこともないですが、しかし具体的に私達が仏教というものにおいて教えられるのは因縁の道理です。縁の方がむしろ様々な状況をつくっている。その状況の一番根源にあるのが因です。その二つが力。一つだけの力だけではどうにもならないという面があるわけですね。それが相補的、お互いに補い合う、それが一種のダイナミズムです。

それでは今日はここまでということにします。